ZOSHIGAYA MISSIONARY HOUSE MUSEUM

雑司が谷旧宣教師館だより

第 67 号　　2021 年 3 月 12 日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5　TEL/FAX　03−3985−4081
http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html

SDGs 未来都市豊島区
TOSHIMA International City of Arts & Culture　SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
豊島区は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。
11月1日は としま文化の日 Toshima City Culture Day

旧宣教師館の近況
―感染症拡大と大規模修繕の中で―

当館は 2021 年 3 月現在、建物の大規模修繕のために休館中です。1907 年創建の当館は、豊島区が取得後、1984 年に大規模な復原工事が行われています。以降、外壁塗装作業の度に、小破箇所の修理も適宜行い、現在にいたっています。

以前から 2020 年秋に外壁塗装と修繕を開始し、その間は休館をする予定で準備を進めていましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3月2日から6月1日まで休館。結果として、2020 年度は開館できる期間も少なくなり、また、コンサートなどのイベントも感染症拡大防止のために開催が見送られることとなりました。

そのような中で開催したのが、「『赤い鳥』を語り継ぐ、おばあちゃんのお話会　200 回記念」です。2003 年から始まったこのイベントは、ほぼ休みなく毎月第一土曜日に開催され続けてきました。感染症拡大防止のために数回休止したことで先送りになっていましたが、長期休館の直前に 200 回達成となりました。当日の来場者の方には、検温や整理券配布による入場などにご協力いただきました。

▲200 回達成までを振り返る小森先生

▲200 回記念インタビューの様子

当館の文化財保存

昨春のコロナウイルスでの休館中、館をより良いものにするために館内の見直し作業も行っていました。

歴史的建造物である雑司が谷旧宣教師館は、文化財害虫（文化財を損傷させる恐れのある虫）が住み着いていないか、トラップを設置して生息状況を確認しています。実は長年、当館では「タバコシバンムシ」に悩まされていました。タバコシバンムシは紙などを食べる虫です。穀粉などにも発生するので、ご存じの方もいるかも知れません。この発生源が 1 階の「『赤い鳥』の部屋」に敷いてあるカーペットなのではないかという疑いが以前からあり、休館中に思い切って全て撤去しました。

7 月前半の調査では、複数確認されたため効果がないと思われましたが、つづく 7 月後半の調査では確認されず、この状態が続けばカーペットの撤去は効果があったということになります。

一時的に減っただけなのか否か、今後も注視していきたいと思います。

▲カーペットの撤去は 10 年ぶり

▲館内の各所にトラップを設置しています

大規模修繕のお知らせ

当館は、文化財修繕のため休館中です（2021 年 3 月 31 日までの予定）。天井や階段、床の一部を補強し、外壁の塗装をしております。

次号ではこの修繕の様子をお届けしたいと思います。

［執筆・編集　小山勝美（学芸研究員）］

記念イベント報告
―『赤い鳥』を語り継ぐ、おばあちゃんのおはなし会 200 回―

小森香子先生とおはなし会

「『赤い鳥』を語り継ぐ、おばあちゃんのおはなし会」は 17 年続く当館のイベントですが、「小森先生の他にはどなたが朗読されてきたのですか」と質問を受けることがあります。実は、このイベントは小森先生がお一人で続けられてきたものです。

小森香子先生は 1930 年、豊島区日ノ出町（現・南池袋）生まれ。1945 年に関西へ疎開し、4 年後に神戸女学院を卒業。1961 年に夫の仕事の都合でチェコのプラハへ赴き、この頃から詩作や文筆活動を開始します。生まれ故郷である豊島区に戻ってきたころ、雑司が谷旧宣教師館に幼少期に自分が親しんでいた『赤い鳥』をはじめとする児童文学のための部屋があることを知り、朗読ができないかと職員に提案。以後、おはなし会を続けて来られました。

小森先生は豊島区にゆかりがあり、また、文学への親しみの心を幼少期から持ち続けており、職員との打ち合わせの際には毎回、様々な話をしてくださっていました。昔の豊島区の話、幼少期の思い出、どんな文学を読んでいたか、戦争の体験。話の内容は多岐に渡っており、職員としては「参加者の方にもこの話を共有できる機会があれば」という思いがありました。今回の 200 回記念では、通常のおはなし会に加え、こういった話をお伝えできる機会を設けたいと、職員が質問・聞き手を行うインタビューも行いました。

当日の演目

おはなし会では、『赤い鳥』から一本、小川未明の作品から一本を選び、小森先生に朗読をお願いしています。『赤い鳥』は発刊地が現在の豊島区目白の鈴木三重吉宅だったこともあり、豊島区では区立目白図書館をはじめ様々な施設に蔵書されています。当館では、復刻版を「『赤い鳥』の部屋」にて全巻配架し、来館者の方に自由に手に取っていただいています。また、小川未明は雑司が谷地域に住んだこともある作家で、右ページのインタビューにもありますが、先生とはご縁がある作家だったようです。

今回は以下の朗読をお願いしました。

芥川龍之介「蜘蛛の糸」

大変知名度の高い作品ですが、初出は『赤い鳥』の創刊号である 1 巻 1 号でした。芥川は、『赤い鳥』の編集を担当していた小島政二郎宛の書簡（1918 年 5 月 16 日）で、「御伽話には弱りました　あれで精ぎり一杯なんです」「まづい所は遠慮なく添削して貰ふやうに鈴木さんにも頼んで置きました」と語っています。最終的に、三重吉は「蜘蛛の糸」の原稿に 75 か所の加筆添削をしたそうです。

小川未明「飴チョコの天使」

未明作品の中でも特に記憶に残っていると伺っているため、定期的に朗読をお願いしています。日本のアンデルセンと称されることもある未明は、雑司が谷に住んだこともある作家です。この話は「飴チョコ（キャラメル）」の箱に描かれた天使の話です。

参考文献：赤い鳥事典編集委員会『赤い鳥事典』、柏書房株式会社、2018 年

インタビュー記録

小森先生にお伺いする「私と『赤い鳥』、童話、豊島区での暮らし」

小森先生の回答内容を出来る限りそのまま掲載しております。

・先生の子供時代の童話の思い出をお聞かせください。

「家に鴨居まであるような大きな本棚があって、当時円本って呼ばれていた本が並んでいた。9 人兄弟の末っ子で、兄弟が読んだ本を片っ端から読んだ小学生時代だった。小川未明さんの一番上のお嬢さんとうちの一番上の姉が青柳小学校の同窓生で机を並べていた。大変親しくお付き合いをしていたようだった。あとから、雑司が谷旧宣教師館で小川未明のお嬢さんと会う機会があった時は、「あの時ひっちょられていたのはあんただったのね」※1 と言われた。母は女学校の出身で※2、村岡花子さんを先輩として文学を好んでいたから、そういった環境で育った。夜寝るときは、子守歌ではなく朗読だった。」

※1「ひっちょる」は背負うこと。小森先生の母は幼い小森先生を背負って小川家を訪れていたとのことです。
※2 東洋英和女学校の寄宿で学んでいたそうです。

・先生は、子ども時代と現在、豊島区にお住まいですよね。子どもの時の暮らしや、今の暮らしのこともぜひお聞かせください。

「雑司ヶ谷墓地の近く、昔、日ノ出町と呼ばれた地域に住んでいた。霊園は遊び場だった。大変悪いことをして遊びまして、漱石先生のお墓によじ登って、飛び降りたら 2 階級特進だぞ、と兄に言われたりしながら遊んでいた。都電の線路沿いを歩いているときに空襲を受け、墓石の影に隠れて逃れた思い出もある。牛が放し飼いにされているような牧場などもあった。東京音頭ができたときの盆踊りは近くの原っぱでやったのを覚えている。紙芝居の上演の時にはお菓子も売っていて、同じくらいの年頃の子はおじさんの近くに集まっていたけど、私は「ああいうのは不衛生だから」と親に言われてやめていた。池袋は何もなくって、都電ではなく王子電車と呼ばれていた…王子製紙に女工を運ぶための電車で、大塚に買い物に行った。ウエハースでアイスを挟んだお菓子を買ってもらったけど、帰りの電車を待っている間、夏の暑い日は家に帰るまでに溶けそうで心配だった。」

・現在も豊島区にお住まいですよね。現在の豊島区についてお伺いしたいのですが。

「戦後は関西にいたりしたけれど、生まれ故郷に戻ってきた。昔遊んだ護国寺などはそのままで、本当にふるさとに帰って暮らしているという感じ。戦争を自分で体験してきた世代だから…3 月の大空襲※3 のあと、今はビルがたくさん建っているけれど、あの下には空襲でなくなった方がいるような。雑司ヶ谷霊園を通るときは子供の時の楽しいことも思い出すけれども、どうしても空襲のことを思い出してしまう。思い出したくないと思っても思い出してしまう。私にとっては、子供時代の楽しい思い出が詰まった地でもあり、爆撃や…死者の方が乗ったトラックのことを思い出したり、そういった思い出が焼き付いている地でもある。」

※3 豊島区の被害が甚大だった空襲として 1945 年 4 月の城北大空襲が知られていますが、小森先生は 3 月の東京大空襲で被害にあわれ、滋賀県に疎開されたそうです。

・先生にとって、豊島区は様々な思いの詰まった地。先生が豊島区に戻り、当館で『赤い鳥』を見つけておはなし会をされていることにご縁を感じますし、感謝しております。

「200 回を達成できて自分でもびっくりしました。この場所が存在したということ、守られてきたことに感謝いたします。」